

友情か、ソドミーか？

——『オセロ』にみる男同士の絆¹に潜む二枚舌——

松尾 江津子*

Friendship or Sodomy?:

The Equivocations of Male Alliance in *Othello*

MATSUO Etsuko

abstract

In the studies of William Shakespeare's *Othello*, Iago's latent homosexuality has been discussed since the mid-twentieth century. This kind of investigation, however, is criticized for nothing more than motive-hunting of Iago's malignity and taking homosexuality as pathology. Recent sexuality studies, which have brought to light various aspects of male alliance in early modern England, show that physical intimacies between men in those days were far from pathology but rather admired as "friendship." On the other hand, "sodomy" was condemned even though it seems that the acts of "sodomy" actually had little difference from the very acts that Englishmen regarded as "friendship"; the accusation of sodomy might be considered as one of the political manipulations concerning class, gender, race, and nationality. If the play represents Iago's desire as ambiguously at once "sodomy" and "friendship," the play can be interpreted to reveal the equivocations involved in the system of male alliance. This article, which reconsiders Iago's homosexual desire for Othello in the cultural and political context of early modern England, reexamines, thereby, a historical moment in which Otherness was being constructed through discourse of sodomy.

Key words : Iago's homosexual/homoerotic desire, Friendship, Sodomy, Moor, Anti-Hispanic sentiments

序

ウィリアム・シェイクスピア (1564-1616) の悲劇『オセロ』(1604頃)において、イアゴの「抑圧された同性愛」²が指摘されてはや半世紀以上経つ。しかし、イアゴのオセロへの行為の動機を「潜在的な同性愛」に帰したこの議論は、イアゴの「動機なき悪意」の「動機探し」の範疇にとどまり、今なおこの劇の同性愛論といえば言及され、批判を受ける。ここではまず過去の議論の問題点と、現代も依然としてこの劇の同性愛批評につきまとう難点を明らかにすることによって、過去の議論から脱却し、この劇の新たな同性愛批評の可能性を探りたい。

90年代後半、アーデン三版の編者 E. A. J. ホニグマンは、その序論で、イアゴに「抑圧された同性愛」を見出すことの問題点を二つ挙げる。それは、この議論の上演における非有用性（「たとえ潜在意識に確かにイアゴの同性愛があったとしても、『上演のいかなる詳細でもそれに触れる意義は無い』(Rosenberg 182)」）と、批

キーワード：イアゴの同性愛的欲望、友情、ソドミー、ムーア、反スペイン感情

*平成12年度生 比較社会文化学専攻

評上の非妥当性（同性愛を論じるのに『オセロ』を題材に取り上げることの不適切さ）である（50-52）。ホニグマンが前者の指摘で依拠したマーヴィン・ローゼンバーグの著書の初版は1961年であり、彼の舞台での非有用性の指摘は、同性愛をイアーゴの「動機」と考えても舞台では何の効果ももたらさないという意味であった（158-60, 178-83）。そのイアーゴの行為の動機探しから解放された現代、特に1990年代以降の映画や舞台では、ゲイ・レズビアン批評、クイア批評の隆盛とも相俟って、この劇の同性間に関係に全く目を向けない上演はむしろないといつてよいだろう³。

過去の同性愛の議論についてのホニグマンの指摘で今なお意味をもつのは、むしろ二つ目の指摘である。実際、近代初期の男性同性愛の研究の進展にもかかわらず、イアーゴの同性愛論はいまだそう多くなく、たとえ取り上げられても、否認されたり、退けられたり、他の逸脱的なものの一部として言及される⁴という不遇な処置を受けている。ゲイ批評で名高いジョナサン・ドリモアも、『オセロ』を論ずる際には「イアーゴの『同性愛』を忘れよ」と明言する。「そのような結論は多くを不明瞭にし、ほぼ何も明らかにしないから」だと理由を述べ（157-8）、女という他者に依存して成り立つホモソーシャルな社会が、それゆえに内包する根本的な脅威のほうを読み解く。また、近代初期のレズビアン研究の先駆者ヴァレリー・トラウブが『オセロ』に見出すのは、女のセクシュアリティに対する男の文化的不安と、その結果引き起こされる女の包摂の主題である。明らかに男同士の同性愛を論ずるよりも、この劇に「ふさわしい」主題がほかにあるとみなされ、それが、いまだこの劇で同性愛を論ずることへの批評家達の躊躇の一つの要因であるように思われる。

しかし、ここに新しい議論を開く可能性があるとは私は考える。この劇で重要課題として前景化されるのが異性愛の問題であるならば、男同士の性的関係はその背後で、焦点化されていない分だけ、ある逆説的な自由を得ることになる。前景化されないからこそ、当時の社会にとって危険なものであっても描きこめる自由を手にはしているのではなかろうか。

これは、近代初期のイングランドで、男同士の同性愛が「危険なもの」だったという意味ではない。現代の批評家がイアーゴの同性愛的欲望を主題として扱わない一つの理由は、近代初期の男達の社会制度自体に起因するように思われる。ブルース・スミスは、「近代初期イングランドの文化は、その権力の分配において、同性愛をより曖昧で複雑な方法で位置付けていた」と述べ、当時の同性愛は「男性性の拒否」ではなく「男性性の一側面」（74-5）であるとし、フロイト的な「抑圧された」セクシュアリティを時代錯誤として退ける。スミスがイアーゴに見出すのは、「他の男達とイアーゴを隔てる『抑圧された』欲望」ではなく、「男達の中で男としての自己を定義」していく「男同士の連帯」である（63）。イアーゴの欲望に関して、これ以上の追及を彼はしない。なぜ「男同士の連帯」という言葉がそれ以上の追及を不要とするのか、その「連帯」の中でイアーゴは何をしているのか。それに答えるためには、近代初期の男達の社会的な関係の仕組みを探る必要がある。

近代初期イングランドでは、男同士の性的関係でも、社会が是認したものと、危険視したものがあった。前者が「友情」、後者が「ソドミー」である。アラン・ブレイは男同士の友情とソドミーの間の違いと重なりを分析し、賞揚されるべき友情と非難されるべきソドミーという相反する社会評価にもかかわらず、双方には「男同士の肉体的親密さ」という共通項があると指摘する。この肉体的な親密さと、それに見合う「感情面での愛慕」を伴った友情という制度は、男達の権力分配の網の目を構成し（Bray, “Friendship” 3-5）⁵、その権力の循環の中で、男達の「愛」は、いわば「潤滑油」（Goldberg 119）として機能する。このように男達の公的かつ私的秩序を支える友情がソドミーに転じるのは、その関係が異常な昇進や反逆といった社会秩序を揺るがす恐れのある時で（Goldberg 19, 119-120）、よって逆に言えば、ソドミーは人を陥れる政治的な道具になり得る。つまりソドミーとは、一種の中傷であり、男同士の肉体的親密さを友情とみなすかソドミーとみなすかは解釈次第であり、操作可能なものだったと言える（Bray 13-15; Matz 262）。

イアーゴはこの劇で、そのレトリックの合間を縫っているように思われる。彼の同性愛的欲望や行動は、危険視される要素を多分に含みうるにもかかわらず、制度のもつ二枚舌を利用して、スミスのいうところの「男同士の連帯」—「友情」—という当時の社会構造の中では取りたてて問題にならない次元に収まってしまふ。近代初期の男性同性愛やホモソーシャルリティの研究が進むほど、イアーゴのオセロへの執着は、「友情」という男同士の連帯制度の一環として、我々の追及の目をすり抜ける。現代の批評家がイアーゴの同性愛を大きく扱わない所以はここにある。

しかし、劇の展開上主軸となる異性愛の問題を盾にし、同性愛の中でも社会に是認された友情を第二の盾として、イアーゴは社会が危険視する欲望を表出させる自由を得ているようにも思われる。本論ではイアーゴのオセロに対する欲望を、社会評価としては両極でありながら実体としては重なり合う友情とソドミーの間に位置付けて考察し、イアーゴのソドミー的欲望が、認可された友情という制度を利用して、ソドミーと解釈される危険を回避するさまを分析する。しかし、同時にそれは、制度が内包する矛盾をこの劇が利用して、禁忌とされるソドミーを舞台上に顕在化させたことにもなる。後景化されて得た逆説的自由とは、社会的禁忌の舞台化、すなわちソドミーの可視化である。

言葉を換えれば、本論は、イアーゴの同性愛的欲望を歴史的文脈の中で捉えなおす試みである。この歴史化する作業は、第一にオセロに対する彼の欲望を当時の男同士の関係の仕組みの中に位置付けること、第二にそれを階級や人種の問題と結びつけることによって行なわれる。『オセロ』において同性愛と階級や人種を絡めた議論はこれまであまりなされていないように思われるが⁶、欲望される男の身体がオセロという異人種の身体であることは、他の劇の同性愛とは違った視点を提示するだろう。まず第一節では、イアーゴの同性愛的欲望を作品から検証し、第二節ではその欲望が友情との相克の中でソドミーとして可視化するさまを三点に分けて考察する。第三節ではさらに大きな枠組によるソドミーの回避と、「見せ消ち」のソドミーの効果、およびイングランドの欲望と欲望されるオセロの身体について分析する。

1. イアーゴの同性愛的欲望

この劇で最も同性愛的と言われるキャッシュとイアーゴの架空の添い寝の場面から、イアーゴのオセロに対する欲望を検証しよう。

イアーゴ：…最近のことです、私はキャッシュと寝ていましたが、激しく痛む歯に悩まされて眠れませんでした。世の中には、あまりに心に締められないもので眠りながら自分のしたことを呟いてしまう輩がいるものです—キャッシュもその口でした。眠りながら彼がこういうのを聞いたのです、「愛しいデズデモーナ、用心しよう、僕らの愛の営みを隠そう」。それから、彼は私の手を掴み、握り絞り、「ああ、愛しい人!」と叫び、それから私に激しくキスし、それがまるで私の唇に生えているキスを根こそぎ引きぬこうとするみたいなキスで、自分の脚を私の太腿にのせて、溜息をつきキスをし、そして叫んだのでした、「呪わしい運命よ、君をムーアに与えたとは!」

オセロ：ああ、おぞましい!おぞましい! (3.3.416-28)⁷

これは、夢を見ているキャッシュがデズデモーナと間違えてイアーゴを抱き、その光景を想像してオセロが嫉妬に悶える場面である。キャッシュの相手が自分の妻だと思ふからオセロは狂乱するのだが、実際に描かれているのは、二人の男の熱い抱擁と濃厚なキスである。イアーゴがキャッシュに抱きつかれているさまを想像して、オセロが嫉妬に悶えていることにもなる。イアーゴは自分が抱かれているさまを想像して苦しむオセロを見て悦ぶ。これはオセロに欲望される己の姿を見たいイアーゴの同性愛的欲望の現れと解釈できる。実際、デズデモーナと自分をすり替えるこの夢は、わずか50行後に一種の成就をみることになる。互いのベッドフェロウを—オセロはデズデモーナを、イアーゴはキャッシュを—亡き者にすることで成立する、オセロとイアーゴの「結婚」の誓いである。

ならば、この場面が提示するもう一つ重要な男同士の関係は、イアーゴとキャッシュがベッドを共にする仲だということである。男同士がベッドフェロウであること自体、この時代では珍しくない。「おぞましい」とオセロが憤怒するのは、妻の姦通に対してであって、男同士の同衾に対してではない。そうではなく、ここで問題なのは、オセロは二人の仲が親密であることを既に知っていたということである。キャッシュの免職とそれに続く場面、いかに多くの「愛」という単語が散りばめられているかを見ればよい。この免職がらみの場面でイアーゴが行なっていることは、オセロに対して「愛」を抱いていることはもちろんのこと（オセロ：「誠実なイアーゴ、…言え、…おまえの愛にかけて命じる」2.3.173-4）、キャッシュに対する「愛」をオセロに（オセロ：「おまえの誠実さと愛が、

ことをやわらげ、キャッシュの罪を軽くしようとするのだ」244-5)、そしてキャッシュ自身にも（イアーゴ：「副官どの、私があなたを愛しているのご存知だと思います」306）、アピールしておくことである⁸。

イアーゴとキャッシュの間にこのような「愛」があったからこそ、そしてベッドフェロウでもあった（とオセロが信じるほどの仲だ）からこそ、キャッシュの話題で始まる誘惑の場は功を奏す。一体、イアーゴがデズデモーナの姦通を仄めかす時に、彼女の何を知っていたというのか。イアーゴが彼女について知っていたのは「我々同国人の性質（3.3.204）」と、オセロも知っている、彼女が父を裏切った事実（209）くらいのものである。オセロが、「いや、これにはもっとある（133）」、「この正直者は明らかにもっと見ている、知っている—奴が打ち明けた以上のはるかに多くのことを（246-7）」と言う時、イアーゴが知っていたのは、キャッシュについてなのである（むろん本当は知らない）。散々疑惑の種をまいた後、イアーゴは言う。「キャッシュは私の大事な友人です（227）」。「友人」はベッドフェロウを意味し、「ベッドは寝る場所のみならず、話す場所でもある」（Bray 4）時、イアーゴがキャッシュのことを—肉体的にも、オセロの知らない事実をも—よく知っていることは、オセロには紛れもない真実となる。

従って、デズデモーナの姦通をオセロに信じさせるためにイアーゴが利用したのは、キャッシュと自分との架空の性的関係だったと言える。この関係があったからこそ、オセロとイアーゴの「結婚」の誓いが成立する。それは互いの愛する女／男を殺すという条件の上に成り立つものだった。男達の友人関係は、男女の婚姻関係と同じ重さで受けとめられ、双方が等価値の犠牲を払い、同等の痛みを負うからこそ、オセロのイアーゴへの信頼は固まり、結束は強固になる。この過程をオセロ側から見ると、彼の中ではデズデモーナを信じるかイアーゴを信じるか、結婚による絆と男同士の絆が拮抗していることになる。それはオセロが二人の“honesty”を秤にかけることから明らかである。ロバート・マーツが指摘するように、「近代初期の文化においては、結婚がただ単に私的で愛情面の問題だけではないように、友情の制度もただ単に公的で政治的なものではないため、また近代初期が性的なアイデンティティを異性愛、同性愛として分断していないため、『オセロ』において友人と配偶者の間に固定した区別がない」（Matz 264）とすれば、“honesty”の意味をジェンダーによって「貞節」と「誠実」に振り分ける必要はない。どちらの意味も持つ友人と妻の“honesty”を比べた結果、オセロはイアーゴの「貞節／誠実」を選ぶのである。従って三幕三場の終わりは、劇の展開上まさに転換点で、男女の絆を凌駕して男同士の絆に軍配が上がった瞬間なのである。

2. 可視化されるソドミー

前節で考察したイアーゴの同性愛的な欲望をソドミーの観点から分析するために、先にソドミーの定義をまとめておこう。まずソドミーとは、結婚した男女による再生産を目的とする性行為以外のあらゆる性的な営み（肛門・口唇性交、自慰、獣姦、姦通など）を指し、男色だけを意味しない。同時にそれは、性的な罪にとどまらず、政治・宗教的な罪でもある。ソドミーとは「自然」の秩序に反する行為全体を指す言葉でもあるからだ。それは政治的には、王を頂点とする階級秩序を覆す反逆行為を意味し、宗教的には神への反逆を意味することから、異端—とりわけイングランドではカトリック—と結びつけられた（Bray 3; Goldberg 18-20）。そのような大罪にもかかわらず、上記の性行動は「ソドミーとは認識されずに、とりわけ友情やパトロン制度と呼ばれ、召使や徒弟、教師と生徒、王と寵臣、女王と侍女の同衾により容易に可能だった」とゴールドバーグは述べる。これら友情やパトロン制度と呼ばれていた行為がソドミーとして「可視化」するのは、それらの行為者が、反逆者や異端など社会秩序を乱す要因と結びついた時のみで、逆に言えば、社会秩序に沿っていればソドミーとは認識されなかったのである（Goldberg 19）。

この観点でイアーゴのオセロに対する欲望を考えると、友情の範囲内のようにも思われるが、そこからはみ出すさまが見えてくる。それはイアーゴがソドマイトかどうかということではなく、友情という制度が行為自体では同じものをソドミーと共有するという、制度自体の抱える矛盾に起因するものであろう。イアーゴのオセロへの欲望はこの制度が内包する自己矛盾を露呈することになる。

(1) 階級侵犯

前節のキャッシュとイアーゴの添い寝の分析にもう一度立ち帰ろう。先程は絡み合うカップルの二重性から、イアーゴのオセロへの欲望を導き出した。ここでさらにもう一段階カップルのずらしを行い、このイアーゴの欲望が観客の前に現れる演技上の可能性を示唆したい。例えば2004年RSC『オセロ』の舞台のように、イアーゴがこの話をしながら、キャッシュが自分にしたようにオセロに絡みつけば、観客の前に現れるのは、イアーゴがオセロに絡みついた姿なのである⁹。つまりこの場合、添い寝の話の中のキャッシュ役をイアーゴが演じ、抱きつかれたイアーゴ役をオセロが担うことにより、単なる嘘だった男同士の絡みが舞台上で再現されることになる。

この三段階のカップルの置換を経てイアーゴのオセロへの欲望が舞台上に視覚化された時、初めて体制転覆的な要素が見えてくる。第一の最も架空のカップル、キャッシュとデズデモーナの場合は異性愛、第二の架空のカップルは、キャッシュがイアーゴに性的に迫る限り、友情の範囲内である。というのは男同士の同衾に性交渉が伴ったとしても、それが身分の上の者から下の者への挿入であれば問題はなかったからだ。だがこれが第三の実際目の前にいるカップル、イアーゴからオセロへの性的アプローチとなると、これは上下関係を覆すソドミー行為であった。「男同士の妥当な親密さが友情よりむしろソドミーと呼ばれる一つの転換点は、...まさに友情が維持する社会の上下関係の侵犯だった」とゴールドバーグは述べる(119)。ソドミーの可視化である。

しかし、一瞬見えたソドミーは、次の瞬間打ち消される。観客は心の中で思うだろう。これはキャッシュとイアーゴの友情だ、あるいはキャッシュとデズデモーナの異性愛だ、もっと端的に言えば、全部イアーゴの嘘だ、と。劇はソドミーを回避する策を巧妙に幾重にも用意している。友情か、ソドミーか。劇はイアーゴの行為をどちらと見せたいのか、結論を下さぬまま提示する。ソドミーを見せながら回避するという「見せ消し」の技法は、以後の二つの点でも共通するパターンである。

(2) 結婚の絆の破壊

ソドミーが可視化するのとは社会秩序を乱す時だということはすでに述べたが、友情と並んで社会秩序を支えるもう一つの柱が、結婚という絆/同盟(“alliance”)である(Goldberg 19)。イアーゴの欲望がソドミーとして見えてくる二点目は、この結婚の絆を廃するまでの排他的欲望を、彼がオセロに抱いていることである。前節の添い寝の場面で分析したように、イアーゴは明らかに妻デズデモーナの位置を狙っている。ゴールドバーグは、クリストファー・マーロウの『エドワード二世』の分析で、「ソドミーが、社会秩序と階級区別の維持の要としての結婚と相続—すなわち血の特権—を司法的に保証する同盟の制度の外にあるものすべて、あらゆる違法なもののための言葉であるなら、マーロウの劇において注目すべきことは、規範的な同盟制度の一方(友情)がもう一方の同盟制度[結婚]と衝突するように放たれていることである」と述べているが、これはイアーゴの欲望にも当てはまる。いや、イアーゴの場合はそれ以上である。なぜならイアーゴの欲望は、結婚の絆と衝突するばかりでなく、オセロが自分以外の男、キャッシュと結んだ友情の絆とも衝突するからだ。「この衝突から、同盟に対立するものとしてフーコーがセクシュアリティと呼ぶものが生ずる」とゴールドバーグは言う(122)。イアーゴとオセロの「結婚」の誓いは、妻という結婚の絆と副官という友情の絆で結ばれたオセロに最も親密な女と男を排除し、その二人の位置をイアーゴが一手に引き上げることを約束するものだった。よって社会秩序を支える二つの同盟を揺るがすこの瞬間、イアーゴの欲望はソドミーとして浮上する。

しかし、劇はまたも可視化したソドミーを打ち消す策を用意している。結局はイアーゴとオセロの「結婚」を成就させないからだ。キャッシュ殺しは失敗し、嘘のすべてが露呈する。劇は最終的にはイアーゴの欲望を否定し、その欲望を成就させないことで、ソドミーを回避するのである。

(3) ムーア人の男への欲望

イアーゴのオセロへの欲望がソドミーに見える三点目は、オセロがムーア人であることだ。ムーアは一般に当時のイングランドでソドマイトだと思われていた。ムーアに限らず、当時の旅行記などから世界各地でソドミー

の言及があった (Bray, *Homosexuality* 75)。つまり、近代初期のイングランドが自己と他者の線引きを行なう際に利用したのがソドミーの言説だったのだ。ここに、人種及び他者形成にまつわる言説とセクシュアリティの問題の交差する点としてのソドミーが立ち現れてくる。

イングランドがムーアやトルコを他者として差異化する際にソドミー言説を用いたと指摘するナビル・マータは、その心理を次のように説明する。当時イングランドにとって、ムーアやトルコは脅威でこそあれ、征服することなど到底無理であった。そのため、実際に征服できた北米先住民についての言説で常套だったソドミーを、征服不可能なムーアやトルコに押し付け、言説上だけでも征服可能な人種として扱おうとしたという (109-27)。

このムーアと北米先住民の言説上の重なりは、スペインのアメリカ支配の過程でも浮上する。国土回復運動 (レコンキスタ) ですでにムーアの制覇に成功していたスペインは、イングランドとは逆に、ムーアとソドマイトの同一視が先にあり、南北アメリカで出会う原住民がムーアと同一視され、「ソドマイトはムーア」、つまりソドミーを行なうものはムーア人でなくともムーアである、という図式があったとゴールドバーグは指摘する (1945)。

では、イングランドにせよスペインにせよ、征服したい相手を、なぜソドマイトと呼ぶのか。ゴールドバーグの議論は、イングランドからすれば当時最大の脅威であったスペインによる新大陸の原住民についての記述であるため、それをそのままイングランドの状況に当てはめるのは少なからぬ問題があるが¹⁰、彼の扱うスペイン人の植民地言説を、「征服者側」の論理ととらえて、彼の議論にもう少し依拠したい。ゴールドバーグによれば、原住民やムーアが本当にソドマイトかどうかの証拠記述はきわめて不確かで、極端な例では、「住民の性習慣にいっさい言及していな」くとも、彼らはソドマイトとみなされた (195)。他者を征服したい政治的意図をもつ征服者にとって、ソドミーは征服者の侵略を正当化する術として機能したことが分かる。

ならば、原住民に課されたソドミーの糾弾には何の根拠もなかったのだろうか。征服者にとって原住民の何がソドミーを想起させたのか。その答えとしてゴールドバーグが提示するのは、「穴のあいた男の身体」である。征服者達が新大陸で出会った男達の「均整のとれた身体」は、耳や鼻や唇に「穴をあけられ」、大きな石や金の飾りをつけて「穴が広げられ」、「歪められ」ていた。成人男性の穴のあいた身体が、貫通された男の身体を連想させることは想像に難くない。そしてこの「穴のあいた男の身体はソドミーの身体である」という発想は、割礼などで自分の身体を切傷する「自切」や「人体生贄」といった行為を、ソドミーに直結させることになる。この連想から、ソドミーは、「土地によって異なる慣例化され儀式化された生活習慣」を意味するようになり、この穴をあけて「侵された (“violated”) 身体」は征服者側の侵略 (“violation”) に対する「抵抗」の証と解釈されたのである (196)。

ソドミーが純粋に性的行為の糾弾だけではなく、反逆など社会秩序を覆す要素と結びついた時に可視化することは前に述べた。これを植民地政策に当てはめれば、征服者に対する反逆的要素と結びついた時に、他者の性行動はソドミーとなる。「穴のあいた男の身体」自体の視覚的連想に加え、その身体に刻まれた「抵抗」が、征服者にとっての反逆的要素として、彼らに住民をソドミーと呼ばしめたと考えられる。

しかし同時に、この「穴をあけられ侵された」男の身体は、征服者側の「侵略したい／侵したい (“violate”) 欲望を映す鏡」であったとゴールドバーグは推論する。「侵された男の身体」は「スペイン人が欲する身体」であり、他者の身体に帰されたソドマイトの糾弾は、「原住民の欲望として投影された [征服者の] 欲望」だったというのである (197)。

そもそもソドミーという言葉は「脱構築的な読みの場」(20) と考えるゴールドバーグは、自己と他者の線引きをするための言説であったはずのソドミーに、自らが打ちたてるその境界を侵犯させ、交差させ、この言葉が根本的に容易な範疇化を拒否するさまを暴く。彼が引用する資料で、ソドミーという語は、上述したようにその意味のずれを含みつつ、元来の男同士の性的関係を指すと思われる文脈でも使用される。例えば、人体生贄や他の日常的・宗教的慣習とともに「ソドミーを放棄すれば」、征服者と原住民の間で「兄弟の絆」を結べるという。そして「異教が正しい宗教に改宗され、聖母が『偶像』に、聖餐のパンが実物の人体に代わりうるが、兄弟の絆や同衾がソドミーに代わる時 [だけ]、その行為は変わらず呼び名のみ変わる」実体が浮き彫りになる。(Goldberg 201-5)。

「ソドミーの放棄」とは「抵抗」の放棄であり、原住民が「抵抗」をやめれば「侵略」は成功し、征服者の文化を受け入れた者とは「兄弟の絆」が結ばれる。征服者の住民を「侵したい」欲望—自己と他者の線引きを横断

するソドミー的欲望—もソドミーではなく「兄弟の絆」として実現可能となる。このような征服者側の論理と、それに対して、それは同じ行為の呼び名を変えただけではないかというゴールドバーグの指摘、この一連の論理展開こそ、まさにこの劇を構造化しているものである。

『オセロ』で用いられている論理は、この征服者側の論理と同じである。普通ならムーアはソドマイトとみなされるのに、オセロは改宗し、「黒人というよりはるかに白人 (1.3.291)」と公爵に言わせるほど、いわば「ソドミーを放棄」している。ソドマイトではなく、対トルコ戦の将軍となるほど社会の内部者であるオセロとなら、親密な肉体関係も「兄弟の絆」—友情—が適用できるという論理である。ここにムーア人の男オセロを白人の男イアーゴが欲望することが制度上、合法となる。

しかし、イアーゴのオセロに対する欲望は、異人種の男との親密な関係を望むものであり、明らかにソドミーを連想させたはずである。この可視化されるソドミーは、舞台上に黒塗りのオセロが現れるだけで、強く印象付けられたはずだ。しかしそれをこの劇はまたしても友情の制度で回避する。同じ行為をソドミーから兄弟の絆に呼び名を変えた征服者と同じく、この劇でも同じ行為を友情と呼びなおす。ソドミーを見せながらうち消し、うち消しながら見せ続ける時、この劇は同じ行為をソドミーと友情とに言い分ける制度自体の二枚舌を露呈し続けることになる。

3. 投影される欲望、回帰するソドミー

このように制度の二枚舌を暴露しながら、ソドミー的欲望を視覚化することに危険はないのだろうか。おそらくあるからこそ、劇は更なる回避策を用意している。ヴェニスに舞台を設定していることもその一つだが¹¹、ここで取り上げたいのは、イアーゴ自体が他者化されていることである。イアーゴという名前で想起されるのはムーア人殺しのスペインの聖人サンチアゴである (Griffin 66-69)¹²。その名が示すスペイン性は、彼もまたソドマイトと呼ばれるイングランドにとっての他者、カトリックであることを示唆し、それによりこの劇はスペインにソドミーを転嫁し、ソドミーをイングランドの外に追いやることができる。

そしてスペインにソドミーを転嫁したなら、逆に、劇はソドミーを明示したほうが好都合とさえ言える。エリック・グリフィンが指摘するとおり、イアーゴがスペイン人であるなら、彼によってイングランド人が想起するのは、16世紀半ばから続くこのカトリック強国との長い攻防の歴史と、アルマダで勝利してもなお残るスペイン恐怖だったからだ。1600-01年のムーア人の大使の来訪からグリフィンが引き出すのは、スペインという共通の敵に対して、むしろイングランドはムスリムと親和性があり¹³、スペイン人に比べたらムーアは必ずしも他者ではないという見解である (73)。しかも奇しくも『オセロ』の初の上演記録が残る1604年、国王になってまもないジェームズは、スペインと和平を結んだ。この突然のスペインとの和平に脅威を覚えた「生粋のイングランド人作家」が、「スペインの国民的英雄かつ守護聖人を悪魔化」し、ムーア人への壊滅的影響を劇化することによって、イングランド国民の伝統的反スペイン感情を復活させ、また王の新しい外交政策への反発を示しているとグリフィンは解釈する (84-5)¹⁴。これほどまでの反スペイン感情があったとなれば、イアーゴの欲望はむしろソドミーに見えたほうがよい。ソドミーを消しながら見せてきたことが、ここで効果的に作用する。

ここまで、制度の二枚舌によるソドミーの回避と、それを国外に転嫁する策を考察した。しかし、そのような操作を経てまで舞台化したムーア人の男への欲望とは、ほかでもないイングランドの欲望だったのではなかろうか。ゴールドバーグの指摘したように、他者に帰されたソドミーは、他者の欲望として投影された自己の欲望と解釈できるからだ。背後にスペインを彷彿とさせる「イアーゴ」は、皮肉にも時のイングランド王の名でもあった (Griffin 86)。いったんは他者化されたソドミーは、自己と他者の境界を侵犯し、横断し、再びイングランドに回帰する。

イアーゴにジェームズの投影を見る時、グリフィンは先述したように、ジェームズのスペイン親和策に対する当時の国民感情から、イアーゴと王の名の重なりにジェームズ批判を読み取る。しかし、それほど明確に国王批判が打ち出されていたら、はたして国王の前で上演可能なのかという疑問が生じる。折しも『オセロ』の初の上演記録が国王御前公演であり、シェイクスピアの一座が「国王一座」となってまもない時である。宮廷公演の記録が「ジェームズの側でこの劇を気に入っていたことを示しているようだ」とグリフィンも述べている (64)。

これらのことから、イアーゴとジェイズの名の重なりを本論の文脈で考えると、イアーゴのムーア人の男に対する欲望は、一方でジェイズを揶揄し、他方ジェイズを喜ばせもしたと推察することができる。ジェイズをめぐる権力の循環の輪は、それこそ男同士の親密な「友情」によって成立していた。イアーゴの欲望にソドミーを見、そこにジェイズを投影させれば王への揶揄になり、男達との「友情」に厚い王好みの劇と考えれば王への追従になる¹⁵。男同士の制度の二枚舌と、その「見せ消ち」の術は、ここでその効果を発揮する。

スペインとして他者化されたイアーゴのソドミー的欲望が、国王の名を通して再びイングランドに回帰する時、イアーゴに投影されるのはジェイズだけではない。他者をソドマイトと呼び、友情とソドミーの二枚舌の合間に生きているのは、ほかでもない、この劇を見ているイングランドの男達なのである。劇場ではムーア人の男オセロは観客の欲望の対象だったろう。イアーゴは、いわばこの観客の欲望を仲介する。伝統的「悪徳」の利点により舞台上観客との連帯を築いていく彼は、観客とオセロの間を取り持ち、観客の欲望を担ってソドミーを舞台化するのである。

最後に、欲望の対象となるオセロの身体について考察する。劇の最後で、オセロは自らを「ターバンを巻いたトルコ人」と「ヴェニス人」の両方に喩え、自身を自らの手で刺して死ぬ。この時オセロが自身を表すために用いた比喩—「卑しいインド人」「アラビアの木」「ターバンを巻いたトルコ人」「割礼を施された犬」(5.2.345-54)—はすべて、イングランドがソドマイトと呼ぶ者達である。これらに自身を同一化させたあと、オセロ自身が「自切」する。ここにオセロの身体は、文字どおりの意味でソドミー的の身体、「穴をあけられた男の身体」となるのである。

しかし、ソドミー的の身体の象徴であるオセロの身体は、それと同時に、イングランドの男の象徴でもあるように思われる。なぜなら、ヴェニス人だと思っていた自分が、割礼を施したトルコ人だと気づかなかったオセロのように、イングランドの男達も、友情の行為が実はソドミー行為となんら変わりがないことに気づいていない（もしくは気づいていないふりをしている）からである。逆に言えば、それに気づいたからこそ、オセロは死に至ったのかもしれない。他者と自己を横断するソドミーは、オセロの身体に集約する。まるでオセロの上に、横断と交差を許し、揺れ続ける境界があるかのように。友情とソドミーの二枚舌がオセロの異人種の身体を媒体に表わされる。その二つのレトリック—友情とソドミー—が彼の身体上で合法化不可能になる瞬間、それが彼の死なのである。

註

*本論は2004年10月10日第43回シェイクスピア学会「セミナー1『オセロ』を読む」における口頭発表に加筆修正を加えたものである。

1 「男同士の絆」については Sedgewick 参照。

2 例えば Wangh 参照。

3 「結婚」の誓いのパロディと称される「今からはお前が副官だ」「私は永遠にあなたのもの」で終わるオセロとイアーゴの誓約(3.3.463-82)の場面を比較するだけでも、時代の推移は明らかである。また、ナン版では、女同士の友情にも焦点を当てた点が注目値する (Potter 190-91)。

4 例えば Gutierrez はイアーゴの同性愛として読めるところを、あえて彼の「女」の役割と「魔女の術」の取りこみとして読み換える。

5 以下、「Friendship」からの引用を「Bray」と表記する。

6 Parker はこの劇の人種と男性同性愛の問題に四つに組むが (98-100)、ほかには Matz が人種について少々言及する (270-71) くらいである。

7 本文における『オセロ』からの引用はすべてアーデン三版による。なお引用箇所訳文は拙訳。

8 ちなみにオセロとキャシオも「愛」で結ばれていた (オセロ:「キャシオ、おまえを愛している」(2.3.244)、イアーゴ:「今回のお二人の愛の亀裂が以前よりもそれを強めてくれますよ」(3.20))。

9 2004年4月18日、東京のル・テアトル銀座で行なわれたRSCの来日公演では、イアーゴ役のシャーがオセロ役のカ・ヌクーベにエロティックに絡むと、観客の忍び笑いを喚起した。シャーがゲイと観客が知っていたのかは不明だが、その場の同性愛的雰囲気によるものと思われる。同様にオセロに絡むイアーゴの演出は、スズマン版。

10 この点は、セミナー準備段階で鶴田学氏からご指摘いただいた。

11 Griffin 59-66。また、彼のこの劇におけるヴェニスとイングランドの状況的・精神的同一視の指摘 (65) は、ソドミーを他者化しても結局イングランドに回帰するという本論の以下の主旨に一致する。

- 12 本論の議論にグリフィンの論が有意義であることは、セミナー準備段階で、セミナーコーディネーターの吉原ゆかり氏にご示唆いただいた。
- 13 ムーア人とイングランド人の親和性は Bartels も考察している。
- 14 『オセロ』の創作年代を1602年と考える批評家もいる (Honigmann 344-350)。その場合グリフィンのスペイン政策への反発という解釈は成立しないが、1602年でも次の王候補としてジェイムズが浮上していたのは明らかなので、イアーゴに彼の投影をみることは可能と考えられる。
- 15 スミスは、ジェイムズ戴冠以降に軍人生活を描くシェイクスピア劇が集中する—『トロイラスとクレシダ』1603年出版登録、『オセロ』1604年、『コロレイナス』1607-8年—のは偶然ではないと考える (75)。

引用文献および映画・舞台資料

- Bartels, Emily C. "Making More of the Moor : Aaron, Othello, and Renaissance Refashionings of Race." *SQ* 41 (1990): 433-54.
- Bray, Alan. *Homosexuality in Renaissance England*. London : Gay Men's Press, 1982 ; New York : Columbia UP, 1995.
- . "Homosexuality and the Signs of Male Friendship in Elizabethan England." *History Workshop* 29 (1990): 1-19.
- Dollimore, Jonathan. *Sexual Dissidence : Augustine to Wilde, Freud to Foucault*. Oxford: Clarendon P, 1991.
- Doran, Gregory, dir. *Othello*. Perf. Sello Maake Ka-Nucube and Antony Sher. Royal Shakespeare Company. Le Theatre GINZA, Tokyo. 18 Apr. 2004.
- Goldberg, Jonathan. *Sodometries : Renaissance Texts, Modern Sexualities*. Stanford: Stanford UP, 1992.
- Griffin, Eric. "Un-sainting James : Or, *Othello* and the 'Spanish Spirits' of Shakespeare's Globe." *Representations* 62 (1998): 58-98.
- Gutierrez, Nancy. "Witchcraft and Adultery in *Othello*: Strategies of Subversion." *Playing with Gender : A Renaissance Pursuit*. Eds. Jean R. Brink, Maryanne C. Horowitz, and Allison P. Coudert. Urbana and Chicago : U of Illinois P, 1991. 3-18.
- Matar, Nabil. *Turks, Moors, and Englishmen in the Age of Discovery*. New York : Columbia UP, 1999.
- Matz, Robert. "Slander, Renaissance Discourses of Sodomy, and *Othello*." *ELH* 66 (1999) : 261-76.
- Nunn, Trevor, dir. *Othello*. Perf. Willard White and Ian McKellen. Primetime, GB, 1990.
- Parker, Patricia. "Fantasies of 'Race' and 'Gender': Africa, *Othello*, and Bringing to Light." Eds. Margo Hendricks and Patricia Parker. *Women, "Race," and Writing in the Early Modern Period*. London and New York; Routledge, 1994.
- Potter, Lois. *Shakespeare in Performance : Othello*. Manchester and New York : Manchester UP, 2002.
- Rosenberg, Marvin. *The Masks of Othello*. Berkeley : U of California P, 1971.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men : English Literature and Male Homosocial Desire*. New York : Columbia UP, 1985. (イヴ・K・セジウィック『男同士の絆』上原早苗・亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、2001年)
- Shakespeare, William. *Othello*. Ed. E. A. J. Honigmann. The Arden Shakespeare. 3rd ed. Surrey : Thomas Nelson and Sons, 1997.
- Smith, Bruce R. *Homosexual Desire in Shakespeare's England : A Cultural Poetics*. Chicago and London ; U of Chicago P, 1991.
- Suzman, Janet, dir. *Othello*. Perf. John Kani and Richard Haddon Haines. Othello Productions and Focus Films, 1987.
- Traub, Valerie. *Desire and Anxiety*. New York: Routledge, 1992.
- Wangh, Martin. "*Othello* : The Tragedy of Iago." *Psychoanalytic Quarterly* 19 (1950): 202-12.

(2005年12月1日受理)